

3-3 外邦図と私とのかかわり

中野尊正（東京都立大学名誉教授）

[編集者のまえがき]

以下は、中野尊正先生（東京都立大学名誉教授）に対し、その外邦図とのかかわりについておたずねしたところ、お書きくださったコメントをまとめたものである。

すでに中野先生は、その著書『山河遙かに』（私家版、1990）で、終戦直後参謀本部から外邦図の運び出し作業に従事したことを書いておられる（16頁）。この記述は、田村俊和「地図を生かす：公開された旧軍用地図を例に」（東北地区大学放送公開講座テキスト委員会編『東北大学の宝物：総合学術博物館への招待』東北大学教育学部附属大学教育開放センター、1998年、94-102頁）さらには浅井辰郎「琉球諸島の地形図はどんな経緯でお茶の水女子大学に入ったか」（清水靖夫・浅井辰郎・小林茂・安里進『大正・昭和琉球諸島地形図集成解題』柏書房、1999年、23-26頁）に引用され、すでにひろく知られるにいたっていた。ただし、上記記載はあまりに短く、現在お茶の水女子大などに所蔵されている外邦図の来歴を追跡するには、上記作業の前後関係や具体的内容について、さらに詳しい証言が必要であった。

これらの点について、小林がおたずねしたところ、中野先生からは前後2回のメモをいただいた。1回目は、2003年10月24日付の手紙に付されたもので、主として経過についてふれている。2回目は2003年11

月13日で、これを補足するお手紙をいただいた。

以下では、これら3点を集成したものをご覧いただき、修正していただいたものを掲載する。なお上記3点のメモの中心は外邦図研究会で配布されたもので、これを軸に集成をおこなった。

なお、中野先生は、その後『人間環境調査余滴』（2004年、私家版、全78頁）を出版され、その末尾に「外邦図あれこれ」（72-78頁）を掲載されている。この文章とかさなる点もあるが、外邦図が大妻学園に搬入されるに至ったのは、中野先生の個人的な知人関係によること、外邦図の利用に関する提言など参考にすべき点がすくなくない。

はじめに

小林さんから示された課題は下記3点などである。

- ・ 終戦前後の状況
- ・ 渡辺少佐と中野の関係
- ・ 外邦図とのかかわり

終戦前後の状況

台湾生まれの台湾育ち、台北高校山岳部中心の活動のなかで、部室に整備されていた陸測図、台湾総督府図、蕃界図は登山その他に活用。一部、海岸地形について、

岩波の科学の拙論¹⁾のように、多少、学習的な使用(1940)。

大学では多田先生のアジア地誌、村田先生の遼東半島の地形図作業など、外邦図の周辺部ともいうべき勉強をさせられた。就職は水路部、病気(中耳炎手術)でこれはダメになり、同期の魚住が水路部 予備学生 航空参謀と活躍、山本五十六と同じ戦闘で戦死。同じく大槻文彦²⁾の孫、高彦は北支で貫通銃剣で戦死。軍とか地図特に外図の地図への関心は高かった。

地理調査所に転じてから知ったことだが、昭和17年図式で、例えば飛行場など擬装した。世界のどの国でも行われるし、意図的でないにもかかわらず、写真測量に中心をおくようになって判読ミスが増えている。

昭和18年ごろから、地形図の入手が困難になった時、満州の新地形図を三部自費で購入、その一セットは戦後、満州史の神田信夫(明治大学)の研究のため提供、彼は学士院賞を受けた³⁾(四ッ谷駅から上智大学へ行く道路端の小林の店で購入)。

に関連した調査の一部は公表されている。例えばオールドス。昭和18年、現地に入城できなかったとき、包頭で入手、一部を抽出したものがオールドスの中国移民分布を示す地図(原図の精度が悪いので縮小すること)。

当時の民国地形図のコピーは多田先生に頂いて、内蒙古調査に使った。等高線がウズ巻。文献から中国内陸の隊商ルートを図化(三井先生の協力)。

内蒙古や熱河では歩測等でみずから作図。興亜義塾⁴⁾の学生にも短期間で訓練をした。作品の出来栄はバラツキがあった。

渡辺少佐との関係

大学卒時に海軍水路部、これが病気でだめになり、資源研に拾われた。資源研助手として勤務中、応召で高知の連隊(本籍高知市はりま屋町)へ入隊(昭和19年5月)、直ちに東満(虎頭、虎林、東安)に転属、対戦車の連射砲の初等兵として訓練を受けた。東満、東安と転戦。戦況不利とは軍隊内では分からず、技術の幹部候補生の試験を受け、技術ではなく兵科の幹候生(特別甲種幹部候補生、通称特甲幹)として久留米へ転属(昭和19年10月)。この制度は1回のみで、後にも先にも特甲幹といえば我々の久留米、仙台などだけである。その頃、東満の牡丹江に東大地質(出身)の久野(久)さんがいた。彼は幹部候補生の試験の時(面接口頭試問のみ)の1人。質問は「満州の地下資源を問う」一問であった。遠藤さんの本を読んでいたので要点はもれなく述べた。満州では連射砲、久留米では重機関銃。このころまで渡辺少佐とは全く接点はない。

久留米に転属になったころ、渡辺少佐が私の参謀本部への転属を満州に手配されたと理解している。この件には多田先生の意向が反映しているとも考えている。この点は、私が初めて渡辺少佐にお会いした戦後9月下旬に直接話を聞いた。

技術ではなく、兵科に、試験も受けないうで廻されたのは、原隊での兵科の成績がバツグンによく、幹候生として久留米に転属になった時、連隊の一番。ただし、引率者はひとつ階級の上の佐藤(デビスカップの選手)。福岡で彼の相棒は中牟田(岩田屋

デパートの社長の息子)。社長宅でとっておきの泡盛をごちそうになった。兵科一番の成績になったのは、連射砲の砲身を一人がかついで走ったり、砲身を支える台座揺架を2人がかついで走れる兵隊は当時いなかったことが関係する。この馬鹿力が外邦図運び屋に活用。馬鹿も使しよう。

久留米入校後、消燈後に中隊長(小熊)に呼ばれた。中隊長はノモンハンの敗戦隊長の小熊少佐(戦後、週刊誌で有明海沿岸で漁師をしているとの記事を見た)。この席で、このままでは日本は敗戦、情報勤務希望を述べた。この前半には中隊長は賛成せず、学校長にも報告したようであるが、この点について後日、教官の一人が私に耳打ちしてくれた。学校長は、この男は見どころがあるので置いておけということであった。この学校長の意見に、渡辺少佐の配転手配が関係があったかどうかは不明。

学校卒業の時、中隊長は訓示のなかで、中野のような人間がいるから日本は負けると述べた。中隊長の発言のとおり日本は負けた。負けた後、幹候の同窓会の席、元中隊長は君達のような人間が頑張る日本は発展してきたと述べた。「君達のような人間」のなかの一人が中野である。

昭和20年の8月、小生は旅団司令部の参謀付将校をしていたが、ここで、旅団正面に敵前上陸の可能性ありやと特命の調査をすることになり、「なし」と断定した。この特命は参謀本部から各地に出されたものと考えている。

外邦図持ち出しとのかかわり

枕崎台風の被害と広島の被爆のため

(九州からの)復員はおくれ、帰京したのは9月末か10月はじめ(正式には10月1日復員復職)。翌朝、帰任のあいさつと今後の仕事の指示を仰ぐため、井之頭線で多田先生のお宅へ伺った。

多田先生は、参謀本部の渡辺少佐のところに出向いて、地図の運び出しをしてくれと指示された。そこで、渡辺少佐に生まれて初めてお目にかかった。上述の渡辺少佐の影はいよいよはっきりしてきた。

初対面の渡辺少佐は、「中野君ですか。参謀本部への転属の手配をしたが、すでに久留米に出発していて実現できなかった」といわれた。これで、信濃毎日⁵⁾の記事に私の名が記されている理由が判明した。

案内された倉庫で10枚+1枚(中野の分)を各図について、別に集積した。明治大学にも少しあるのでそれも運び出して良いといわれた。市ヶ谷の作業を終えた後、明治大学の正門に入って本館の左側の事務室の前の廊下を少し左に進み、階段を下りたところの倉庫、大学の事務員が案内してくれた。この事務員は特命を受けている管理職のように思った。ここの作業は量も少なく、すぐに終了した。

選別作業は市ヶ谷と明大で1週間か10日位だったと思う。作業中他人が出入りする事はなく、私1人で、6トントラック平積み1台分をさばいた。明治には渡辺(操)、岡山(俊雄)両先生がおられ、よく存じ上げていたが、渡辺先生はまだ復員されていなかったかもしれない。岡山先生にはこの作業の帰途、四ツ谷駅下り急行ホームでパツタリお会いした。地図の件は何も話さなかった。

選別した地図の運搬先がない。資源研

(百人町)はまだ使えないらしかつと今は考えている。どこかあてはないかと多田先生。運び屋でも不動産屋でもないのですが力持ちの私も困った。はたと気付いたのは市ヶ谷とお茶の水の双方に近い大妻学園(女子校)はどうかと多田先生に相談して許可を頂いた。中野は女子校のことをよく知っているなどとかかわらないで下さい。この秘密はいずれ書きますので...生きていればの話です。

大妻は短期間ならということでしたが、半地下の窓ガラスも割れている部屋へ、私1人で運び込んだ。この体力は軍隊で鍛えられたものである。この席を借りて渡辺少佐殿に厚くお礼申し上げます。しかし、こんな力仕事をしていただけでは学究らしい生活は無理、気がついたら渡辺少佐肝入の地理調査所でGHQ指令作業の80万分の1土地利用図の編集を1年契約でしていた。

しばらくして、昭和20年11月末ごろ大妻から復旧工事をするので、地図を撤去してくれと連絡があった。多田先生に相談すると、関戸さん(文部省)の住宅が借用できるというので、再び「苦力(クーリー)」になり、世田谷の関戸さん宅に運んだ。冬枯れのはじめのころのことである。

ところが関戸さんが弘前大学に転出するので、また運び出さなければならなくなった。このときには私は地理調査所の委託で土地利用図の作成に係る事務的手続きのため協力できず、復員して資源研(百人町)におられた三井(嘉都夫)先生の出番となった。かくして外邦図劇は第2幕がはじまった。

運び出した地図が明治大学の図書館とか地理研究室にないのはどうしたことだろ

うか。今でも分からない。

外邦図と私のかかわりの95%は運び屋、5%以下が調査。

注

- 1)中野尊正(1940)「狭窄セル河口」科学(岩波書店)10(6)、10頁。
- 2)「言海」の著者。1872(明治5)年文部省に出仕し、英和辞書の編集にあたり、師範学校の校長を務める一方で、イギリスのウエプスターの辞書にならい「言海」を編集していった。各語の発音、語の類別や語減・語釈・出典などを記したこの辞書は、1891(明治24)年に刊行され、広く用いられた。
- 3)[中野注]外邦図の効用の例として、神田信夫の学士院賞の正式題目は(受賞:昭和32年)「満文老档文編第一卷太祖1及び第二卷太祖2」の共同研究。彼は東大東洋史卒。小生の後輩(台北高校)。2003(平成15)年12月30日死去(享年82歳)。彼の父親は京都博物館長をつとめた神田喜一郎(台北帝大の東洋史教授)で、この人も知っています。
- 4)文化工作要員養成の為に蒙古善隣協会によって1939(昭和14)年に創設された。
- 5)「続占領下の空白、『地理調査所』物語」信濃毎日新聞連載(1995年12月23日~1996年2月14日、全30回)のうち、第5回(1995年12月29日)。ここで、中野先生は終戦直前に参謀本部で開かれた「本土作戦研究委員会」(兵要地理調査研究会)に、辻村太郎ほか地理学者とともに参加していたとされる。